



新編俳林

中村俊定文庫  
文庫 18  
572

五  
一  
九

新編俳林良枝叙



水之聲。聲觸石。石鳴矣。此書也。  
子橋。菴主。集。晨。月。夜。臨。序。  
觸。着。門。弟子。之所。向。發。應。  
在。了。餘。音。集。兩。終。為。一。也。  
常。所。業。其。精。壽。干。梓。焉。菴。主。

固辭不許也。雖終以夜服膺  
不措者尚多。今也忘却負  
命之責。袖此書來告。曰  
望俱來。予守予闕之云。菴  
主者。始是。王工者。卒。隨擇  
受用。信。取。於。來。始。終。粗

揚。推。而。陳。之。然。理。事。能。為  
曉。易。各。也。不。如。一。為。目。流。初  
學。之。船。筏。二。技。也。書。寫。勞  
年。於。平。茲。乎。同。亦。緣。畧。述  
其。端。以。出。之。序。之。下。爾。

安永九年庚子歲仲夏

甲北菽人春澤題



柳亭石書朱書



新編俳林良枝 上之卷



東國平橋菴敲冰輯

拙山口辨

芥りをとりて山林に親よむ松の本梅とぬき  
榎の本れりよくあまむの本梅やこれよき  
割て板に用也へく桐魚の本のきふひらふ  
薪とあひし功ありて山林よるぬく孝子小

一本子之飛騨人の角く之にうきまの良材  
をうきまの何よりとて就宮室を以てまみ  
付らんを良材とてとまきく之は拙すを  
を下をまの良材他より良材ををまの  
時を曲りておしを深まらぬ九たの  
さむし丸の床をくま不建るそのうき  
花の本も梅も其位をほ了他より新古に  
際撲意変る新しき良材とて

ありて材木換之よん中をくを書院庖厨乃  
隔もなく見る目をくま家作とて  
その材をさしつ板を先まきく時ハく  
材木をけい云後うす。時ハ布を材木  
はのりか易に表能ふ能ハうきく趣向の  
先ほあらんしや新をく山其を  
うき

大意

藤と藪向立ちの時ハ或ハ見送分二了了一舟柳版  
上取下取の字一ハ或ハ杖を用一遊具の藪向  
あつて一投壺川竹二料取一杖を用一

○忘句ありし

忘ハ一有ありて持さる物多れ

竹向子鳩てふく一時不れ子ありて一家一

お指 決取 鏡 掃 ぬ羽の藪全キ忘一

あつて一二句連る時ハ忘一

見合一心子際一定一

取一信一鳥一乃一表一恥一

准花。會釋月ハ二根ハ杖拍天おとく一時

花垣の庄 花乃二節 月の輪屋 月毛の馬

如斯の類一月花の文字を一ハ其の一志一  
おく一句作の志をり一ハ心一乃有一

花 佛一喰一魚一不一き一ま一ま一

緑一も一見一二節を一作一れ一て

月 七一夕一ち一ら一炎一撓一乃一無一替一

然一分一七一月一の一輪一屋一隈一あり一て

○春秋季 月花のうけ一乃一高一用一之一趣向一を

先うて當季ハありふるはるはる

春  
（仙合申すと云ふ） 桃色  
湯上りを売らきて湯才扱ひ

秋  
（聖の躰乃 足成 櫛えり  
二枚入を 蟹小 御了と云 脱兼く

初經也、辞文選の類ハ唐初の詩人の山林之と云  
清少納言の雙紙字活乃物汗百萬のうらみおろし  
他人の山林年一也

### 神祇 釋教

這箇の世ハ所詮附句の為にされや  
後句ハ中井中（ま）い葛匠乃堪名之  
●黒園ハ季為の物之己下效之

迂宮 御子良子 子良館 御供而 火燒屋

神樂飛 湯立 千垢離 百度糸 百万通

勅額 願書 諷誦文 普化寺 梵論

唐僧 名僧 唐僧 帰依僧 僧正

僧都 蘇傳長 蘇の率於婆 蘇の母 施行

施火 木鉦 關伽 關伽棚 關伽桶 神穗木



造行 侘阿 如意 袴の子 抜糸 辻家町  
 鉢叩 亨也忌 百年忌 焼香 輪糸  
 坐具 放生 用定 魚版 雲飯 禪板  
 禪鞠 寺家 寺領 社行 黒木多居  
 弁官 長官 羞行 芽軸 木綿袴  
 侘官 神乐男 切火 佛師 拂子  
 穉子 浴油 柴取 納所 長老 授戒  
 番祿宣 半官 浄師

意廻 并 意りらひ

嶋原 志かき町 本辻 吟川 之園  
 鞠 丸山 石垣町 古市 ちと巳  
 室の津 七八 三子郎 伽やろろ 湯女  
 大湯女 小湯女 河之女 為女 出女 舞子  
 白松子 秘子 陰馬 亮 小傾城  
 仲居 おろせ 花車 志の原 呼屋  
 分前岐 竹女房 胃探 聲入 娘入

髮買 牙邊 女医者 鈔本 漆本  
 雜假寐 繁廣 李陸帶 中垣 涉書  
 門立 有丁丁 長扇 仇丁丁 仇名  
 優名 恪名 吉快 起請 過占 灰占  
 梯占 足占 魁想文 綵帽子 彼  
 袖引 裾引 隱衣 赤衣 洗ひ契  
 下髮 寐机 髮 お傘 西口 耳  
 立寸 縁 方婚 魁香 白ひ袋 移名

姿見 合せ鏡 記念 洗聚 洗聚祝  
 初洗聚 黛 眉作 幼末 お圓 独麻  
 中廻る 長枕 空の机 目くらせ 尻目  
 言禱 二道 憎 水祝 粥杖 粥本  
 取摘 取ききめ 迫まきり 色おとす  
 衣類 食類  
 端無 タシ 卓食 ニッホク 毛蒲團 熟立 襦袢  
 短子版 蓬ひ膳 茶の沙 返茶 心友 傍伴

襪子	羊年破	若き酒	茶喉	苺版
小豆版	沖銘	銘のま石	一夜銘	版銘
一夜酒	梅酒	銘	編綴	草羽織
指衣	手干	手袋	治	諱酒
普水	干版	道の寺	居古衣	新衣
丸印中	飛取中	鴨焼	榎焼	白紙子
神味噌	福茶	毒麩	猪口銘	茶粥
いと粥	拾智	門茶		

態藝 并 道具

順の舞	通辞	金塚	馬医者	伯乐
馬工郎	牛の目利	切洲治	嶽洲治	
百物語	野芝居	旅芝居	七日芝居	
夜芝居	通一矢	代脈	外科	木化リ
庭師	楽人所	簫	算策	一節切
又ハ	人形屋	嚙子	薬能	芝能
箔並	箔屋	箔の槌	面步	百鞠

まじり炭 楽焼 琵琶法師 琴のサ子

投壺 試樂 百粒守 施茶 草粘

猪狩 川粘 川よこ 弓細 かるてん

細歩 夜細 盗細 釣好 釣舟 沖の至

温泉めぐり 京見お 田植足 意足 夜遊

棚さうう 子科理 なくさき 畑

器財

雪車ユリ 新車ユサ 嬰児エシ 灰汁桶 井罌

盥罌 鯢鮓コツ 短蓑 肉刺 扇墜 魚モ 叉

砚屏 文鏡 風法 筆溜 筆架

矢屏風 喚筒 冠桶 冠棚 黒棚

吹草 鑽ツカ 木浹 乾風呂 酒桶

漬クラ 連サ 靴 儿帳 紙帳 温石

磨姑の 志野桶 礼節 舟舟 婦人 抱抱 簞

抱桶 裁板 入子盥 茶臼 草草 屋金

短丹丹 經串 篋ワ 纏カ 輪 草桶

湯婆 トウボ 並火鏈 唐札

書画

倫旨 撰集 亦可送狀 書畫之出  
夏書 席書 指画 燒筆 陰圖 墨紙  
彩色 繪合也 迷子の札 木の守 取筆  
写し物 算札 浦子形 留筆 樂書  
札紙 旅日記 万字書 砂之 水書板  
玉盤 茶茶筆 力墨 圖取

器請

城普請 地刻 水繩 石橋 籠柱  
籠師 瓦圓板 大工 番匠 木挽  
石巧 棟上 福徳 左友 足代 菅智  
彩壁 簾抄 祈初 法施 卷轆轤  
大浴房 木の端 籠層  
水邊 山類  
籬竹 水天杭 洗濯石 帆風 帆綱

碓洞 舟虫 弘祖 弘渡 | 野渡 |  
 縹水 川浄庵 樓船 船 高瀬 入舟  
 上舟 番船 傳子船 舟引 弘橋 築吉  
 禁断の池 垣畑 銷直 涌湯 湯畑  
 幕湯 反橋 柴橋 渡初 山畑 山田  
 湊田 鏡畑 藤町 藤川 九折 炭竈  
 浮急 幸の坊 谷の尻 山守 氷室  
 綱代 罌引 伏渡 たつべ 碓山

後井 後池 田井

居所并場

列莊 山莊 千手堂 外屋敷 漢屋敷  
 的栢子 狐栢子 下地意 寺者柱 虚栢ウツラハシラ  
 栢栢 昆布の屋根 松皮葺 穴居 二階三階  
 練堀 柳下売垣 生垣 片折戸 枝折戸  
 山居 柴乃菴 芦の丸居 板多居 下馬石  
 産屋 外壁 土穴 茅葺 柴屋

芝草門 一ツ家 弁塚 字家 貸中妻  
流。夏 いろは茶 八ッ株

名取川 地谷風俗

白河関 うやじやの市 お坂 不破 三ッ一  
熱海 有馬 橋名の毎宗 七里の関 日永の里  
下よし石 教生石 須磨 ぬる内家 沖越の松  
源崎 千葉寺 宮ふる 源ふる ぬるぬ火  
伊勢海 七不思像 隅田川 大井川 市ノ毛

諏訪の湯 イナワシ 一担為 お籠の渡 浮清寺 木曾

姥ヶ崎 井の市 高水市 木丸殿 鳴門

波打子 不二 並う巻 源子 四ッ橋

洲田 古多助 山崎 中崎 徳倉

新渡 栗津 奈良 芳野 柴野軒

和住庵 五郎白良解 法入

旅行

勝川 門送 百引 川島川支 四ッ橋

山登 かい下立 入唐 向山海 海の宿  
進ふ 立坊 暑り 宿刻 木質  
お宿 定宿 通一管 油旅 瑞巧者  
岩柳枝 下向 昇進 首達 進出 見送  
行神 おまゝ

風雨 會釋 迎夕の抄

私向 初風 飛をる 穴所を 去る風  
乾東風 吹東風 度る ぬまゝ  
まゝ

村向 芳雨 脆 比歳おろし 武彦山風  
やまの 雨 雨乞 社 雨 晴 雨 小夜時雨  
まゝ 初風 浪風 雲 祝ひ 雲 霞  
まゝ 九け 雲 水 日 和

生類

水魚 水魚の伎 仏法僧 慈恵心寺 陸尾の誓  
あまむ きくく 臥猪 古依弱 海 麻  
ぬく 位 蚊 柱 誇の尺 桐 檜



放生乞 放生籠 合食和 架カマの布フ 飯架  
馬魚 唐魚 馬市 唐の布 イケス 魚見

植物

植松の松 栲松 破訓書 破訓本 阿古るアコル  
子市 植木市 左ふ弁 神の本 下シタの松  
隠色松 植込ウケ 菜ナ 俵ハタケ 序シ 樹

人倫

さるサ 市シ 伊イ 加カ 流リウ 詩シ 古コ 工コウ 迷メイ 子シ 日ニチ 三サン 位イ

清士 浪人 番振 糠罌 雇人 杀人  
説教者 換校 醫女 小童郎 哲人 獵師  
雜兵 唐衣者 唐人 三ッ子 仕丁 青侍  
舎人 高タカ 区ク 猿イヌ 川カハ 獅シ 舞マユ 人ヒト ねネ 女メ  
列レツ 卒ソツ 牧士 藤フジ 葉エハ 一ヒト 便ベン 湯ユ 寒サムイ 蕪ウ 匠シヤウ 者モノ  
市女 小糸女

花 并 准花

花昔 又マタ 古コ 花守の投持 かし花 花摺

花見人 花見二宮 花見 花見 花見

花見柳 花見の石 花見の石 花見の石 花見の石

花見の石 花見の石 花見の石 花見の石 花見の石

花見の石 花見の石 花見の石 花見の石 花見の石

異名月 并 會稗月

桂男 玉兔 吟星 弓張 既守 柳歌

立待 居待 臥待 月子 有明山

夕月 馬の月毛 今月橋 月の橋

新編俳林良枝 下之巻

文藝の通ち詞意を望む歌よの外なり 世に  
歌よきは佳句なり 人情を色の上より先哲の  
用きし初を好む 歌ハ形あるハ心おとりの言さ  
聖賢の詩ハ體要を尚ム 是異を好みあり  
とやうなり

雅祇 野祇 鄙祇 俗祇 四ツの祇あり

那神ハ好シ美トク 生れのおれ根ハ影ヲ多  
凡人の死シキルヨキ 衣ニテ不儀リヨク  
佐神ハ諱小及以

其風や麦の中節あり者 越人

乞フヤ將神フテ 麦畑の糸色画ヲ見ヨ  
一トク優婉ナリ

ありの爲ニ認めテ 梅陰を名氏  
冬枯一丸屋ニ松の一本バ、

梅金をかして遊リ人 年忘

梅陰ハ不肯有 初陽ヨク 聖神ニ冬枯ハ部神  
あり何ヤヤ 函云ヤ 不初を傍リとれと連テ  
下ク寸彼ヨキ 美ぬと云 不儀リヨク 一トク  
句如神ナリトハ 乞シ 梅金ハ俗中ノ俗友  
三偷ハ 諸を盗 意を盗 物を盗 是之ヲ  
評を登むハ 純誠ニ 勢と登マハ 大盗ヲ衆

暮る麦をちとて 山語ハ 翁

麦飯の島子まゝ一年乃尋 麦林

ささや勢を登く青乃字小利しき安あ  
万葉に ささやもや國はみくもささや  
ささやのあれまもをいと詠るを後京極  
拾改古事類の月ひとりささやにて自詠  
ささやのささや七文字ふくむを轉し  
事ぬこ武の詩も手携双鯉魚目送千  
里鷓鴣や佐りを目送歸鷓鴣手揮五絃

ささやのささや 孟嘗君の花小白狐乃かハ  
ささやのささやを賣るふ其價千金  
ささやのささや 芭蕉翁の白月中のかいささやハ  
ささやのささや

昔語をいひまや久すささやのささやハ  
ささやのささやをささやのささやハ  
ささやのささやをささやのささやハ  
長支越向かるとささやのささやハ

歐陽永叔五代史を撰む時向人未々物語  
道き希有の事傳りた丈の道取子所  
多りしを馬々多末て踏殺さるとも色を  
歐陽云曰それ文之間古ふはもこと依  
有大夫通衢一逸馬踏之死と書く出せ  
公のいそつ了下やなると史書の如き勅略  
なく祿を費甚しきこと大夫死奔馬下  
と書こころとなん是き五字のみ取を

あしう或ハ王昭君を詠と詠和歌と

何ぞか木の人たむなのおとろくを

つらとや筆ふな一筆をん

見るよひ子鏡の鏡のほくきり

か夜さうせをころころヤハ

明妃曲は古き執向を詞つまやうふ詠を傳りき  
或ハ希因の白子

別もころ先へよりのれめを志

是も河一く人情不確へく心のちくこ書  
趣向かれも知はく平やうし

句ハ死活のり方一し詩歌共子日一  
人情系色のと何も活あつれを文雅  
阿す杜甫詩は落日在簾鉤一李白詩  
白髪三千丈とつらうか一 或はうらうら  
人を御使のしから一をきうれは初め  
とれを定家々も此うらを和文。余との

のまひ一とをんむハ又

ハ九百やうて西路の希少 翁

うんちを家と淋いんてり 喜舟

死活の事ハとくハ文雅の上あつても  
茶話の座あつても活あつても人の人  
付るなす

後句に切字の事ハナハ品をよあるの切字  
之れともん切のりから有る一切字の活

心細を跡を為こころ初跡の時かいつの  
あふの位を培ふこころ首領の言分は原の  
物語をりく師説あるさう好むさかた子明も  
あふのハあふて初跡の跡さう行要たう  
さ形もよく初分あつてけりみおこころ  
初跡の糟粕こころ得る一

阿はま山や吹海りけてつぎみよ  
本隠れく茶摘ややほま

跡多可く阿はまハあふまふさうさうをり  
さる一ま人の酒ねまあぬ極くこころめ  
附合不七名ハ神をく根くの名目あるに於て  
変化の爲こころ昔ハ聲ハ言ハ走ハけこ  
中江ハある有心 金。輝。迹。白。是こ  
一光の变化をつまやうて見る的ハきく  
二存足風まふも山川字本多あま雪乃  
様くあう人情も美御老翁男女傳尼の

不<sup>二</sup>く<sup>一</sup><sup>三</sup>ち<sup>二</sup>と<sup>一</sup>三<sup>四</sup>夕の<sup>五</sup>く<sup>六</sup>り<sup>七</sup>四五<sup>八</sup>夕<sup>九</sup>れ<sup>十</sup>と<sup>十一</sup>ひ<sup>十二</sup>ハ<sup>十三</sup>四<sup>十四</sup>時  
運<sup>十五</sup>行<sup>十六</sup>の<sup>十七</sup>く<sup>十八</sup>き<sup>十九</sup>く<sup>二十</sup>く<sup>二十一</sup>と<sup>二十二</sup>改<sup>二十三</sup>さ<sup>二十四</sup>る<sup>二十五</sup>と<sup>二十六</sup>自<sup>二十七</sup>ら  
ま<sup>二十八</sup>き<sup>二十九</sup>く<sup>三十</sup>輪<sup>三十一</sup>扁<sup>三十二</sup>とい<sup>三十三</sup>ひ<sup>三十四</sup>く<sup>三十五</sup>との<sup>三十六</sup>車<sup>三十七</sup>を<sup>三十八</sup>他<sup>三十九</sup>ら<sup>四十</sup>く<sup>四十一</sup>出<sup>四十二</sup>し  
角<sup>四十三</sup>夕<sup>四十四</sup>の<sup>四十五</sup>心<sup>四十六</sup>時<sup>四十七</sup>ハ<sup>四十八</sup>祈<sup>四十九</sup>用<sup>五十</sup>と<sup>五十一</sup>自<sup>五十二</sup>他<sup>五十三</sup>を<sup>五十四</sup>見<sup>五十五</sup>ら<sup>五十六</sup>る<sup>五十七</sup>事<sup>五十八</sup>  
カ<sup>五十九</sup>一<sup>六十</sup>人

伽藍のやうな家て大をたぐ  
ま<sup>六十一</sup>く<sup>六十二</sup>き<sup>六十三</sup>る<sup>六十四</sup>鏡<sup>六十五</sup>の<sup>六十六</sup>形<sup>六十七</sup>の<sup>六十八</sup>映<sup>六十九</sup>え<sup>七十</sup>

前<sup>七十一</sup>夕<sup>七十二</sup>の<sup>七十三</sup>全<sup>七十四</sup>祈<sup>七十五</sup>ら<sup>七十六</sup>る<sup>七十七</sup>事<sup>七十八</sup>と<sup>七十九</sup>足<sup>八十</sup>中<sup>八十一</sup>の<sup>八十二</sup>事<sup>八十三</sup>

ま<sup>八十四</sup>き<sup>八十五</sup>る<sup>八十六</sup>事<sup>八十七</sup>の<sup>八十八</sup>用<sup>八十九</sup>時<sup>九十</sup>く<sup>九十一</sup>く<sup>九十二</sup>

曾<sup>九十三</sup>祖<sup>九十四</sup>又<sup>九十五</sup>く<sup>九十六</sup>家<sup>九十七</sup>ハ<sup>九十八</sup>積<sup>九十九</sup>む<sup>百</sup>海<sup>百一</sup>の<sup>百二</sup>事<sup>百三</sup>  
人<sup>百四</sup>ハ<sup>百五</sup>利<sup>百六</sup>口<sup>百七</sup>く<sup>百八</sup>物<sup>百九</sup>を<sup>百十</sup>取<sup>百十一</sup>ら<sup>百十二</sup>ぬ

お<sup>百十三</sup>う<sup>百十四</sup>ハ<sup>百十五</sup>三<sup>百十六</sup>代<sup>百十七</sup>街<sup>百十八</sup>一<sup>百十九</sup>さ<sup>百二十</sup>み<sup>百二十一</sup>ひ<sup>百二十二</sup>し<sup>百二十三</sup>され<sup>百二十四</sup>を<sup>百二十五</sup>は<sup>百二十六</sup>事<sup>百二十七</sup>本  
二<sup>百二十八</sup>ハ<sup>百二十九</sup>布<sup>百三十</sup>の<sup>百三十一</sup>一<sup>百三十二</sup>も<sup>百三十三</sup>持<sup>百三十四</sup>よ<sup>百三十五</sup>つ<sup>百三十六</sup>さ<sup>百三十七</sup>物<sup>百三十八</sup>を<sup>百三十九</sup>と<sup>百四十</sup>お<sup>百四十一</sup>う<sup>百四十二</sup>く<sup>百四十三</sup>こ<sup>百四十四</sup>こ  
付<sup>百四十五</sup>せ<sup>百四十六</sup>り<sup>百四十七</sup>お<sup>百四十八</sup>家<sup>百四十九</sup>ハ<sup>百五十</sup>積<sup>百五十一</sup>む<sup>百五十二</sup>と<sup>百五十三</sup>自<sup>百五十四</sup>の<sup>百五十五</sup>白<sup>百五十六</sup>作<sup>百五十七</sup>な<sup>百五十八</sup>取  
れ<sup>百五十九</sup>人<sup>百六十</sup>ハ<sup>百六十一</sup>利<sup>百六十二</sup>口<sup>百六十三</sup>と<sup>百六十四</sup>自<sup>百六十五</sup>の<sup>百六十六</sup>白<sup>百六十七</sup>は<sup>百六十八</sup>伝<sup>百六十九</sup>り<sup>百七十</sup>傳<sup>百七十一</sup>る<sup>百七十二</sup>自<sup>百七十三</sup>他  
粗<sup>百七十四</sup>詰<sup>百七十五</sup>ま<sup>百七十六</sup>く<sup>百七十七</sup>の<sup>百七十八</sup>事<sup>百七十九</sup>ハ



（ 此の人も昔々ハ居るまゝの事  
何をかきひの地盤 文行 ）

昔々あの人も他の方作るな何と思ふの  
と他。の事ハ明白を伝ふと伝ふ。

然中明白に伝ふハ人の傳ふ事ハさうも  
趣向を束じしハかかすをさうも傳ふ人の  
おなるを傳ふ。うらハお孫の之を人より  
さういふ。

月並定念などの席中も先一吸ハきくと  
安くなる。さく。家屋を建て人も一々  
網子をきく。なり。相儀式の席は宗匠のハ  
執筆ハ之。惜文。産。腕。付。連。席。亭。主。の。心。は  
別書ハ委し。事。お。之。さ。か。な。ハ。略。し。  
最。句。き。兼。引。南。座。も。不。必。替。お。後。句。認。て  
何。ふ。一。さ。く。卒。さ。さ。ふ。出。し。さ。く。白。い。よ。さ。も。意。傳  
か。な。し。を。さ。く。え。日。以。て。名。を。か。け。な。る。人。の。地。置。ハ

多下く紙を述くも信用しうくまの如し  
色紙短冊寸法書法多しを可く事あり  
篇畧に認るれは風流あり且或る作も  
まくなまのなる

安永第二登己年卯至日社中後学の人多く  
せちじよと史きるまのいをみかこく  
のれやると傳れ

甲州

平橋菴藏版

安永十丑年二月

皇都書肆 取次所近江屋安右衛門

姉小路通高倉東江入町

佛師原是

此主

龜吉